秀賞

いってらっしゃい

福島大学附属中学校
二年　遠藤　てまり

「いってらっしゃい」

朝はどの家庭でもこのあいさつを耳にすると思います。もしかすると、けんかをしている時や反抗期、思春期だとこのあいさつをしないのかもしれません。しかし、私の家ではこのあいさつをしない日というのは何があってもありません。そして私はこのあいさつに毎日のちからをもらっているのです。

私の家は昨年、父が病気で亡くなり母と兄と私の三人で暮らしています。母は私のために毎日一人で仕事と家事を頑張ってくれています。しかし、私が母のためにできることは本当にわずかで小さなものばかりです。勉強や部活を頑張る、家事や手伝いをする、友達と良い人間関係を築くなど、当たり前のことしかできません。私は自分のできないことの多さに心だけが焦ってしまい、いつも何事にもがむしゃらに取り組むようになりました。しかし、それでは体力や精神力が限界を迎えるのも時間の問題でした。実際に体調を崩してしまうことや、母や兄に対して強く当たるようになってしまうこともたびたびありました。母と兄はそのたびに辛い思いをしたと思います。それでも私は反省せず、自分のことだけを考え、生活していました。しかし、そのような日常の中で、私を変えた出来事が起こりました。

ある夜のことです。いつもと何も変わらない何千回とある夜の一回にすぎませんでしたが私のずっと抱いていた心の焦りは最高潮に達していました。ここ数日はテストでも納得のいくような点数が取れず悩んでいたため、焦りは私が思っている以上に加速していたのです。その焦りで私は少し不機嫌になっていました。母はそんな私の様子に気づかないわけがありませんでした。私と母、二人きりのリビングはいつになく静かで無機質な空気が流れていました。そんな時でした。母は重い空気を押し切り、おもむろに口を開いて

「たくさん悩みなさい。」

と言いました。あまりに唐突に放たれたその言葉に私は理解できず、母の目をじっくり見て次の言葉を待ちました。母はまた、ゆっくりと話し出しました。

「お母さんはたくさん悩んで考えることが一番大切だと思う。だから急いで解決しようとすれば良いわけじゃないのよ。」

怒り出すわけでもなく、静かに話す母に、私は少し驚きました。さらに母は話を続けます。

「いつも元気そうに学校に行って、勉強や部活を頑張ってくれることがお母さんは嬉しいのよ。だから焦らないで。」

予想外の言葉でしたが、私の中で絡まった糸が解けていくような感覚がしました。母はとっくに私の悩みを見透かしていてたくさん悩んで考える時間を与えてくれていました。だから私がどんなに不機嫌でも母は決して怒らずにずっと待っていたのです。この出来事から私は自分の今までの行動を反省し、人として成長しようと頑張るようになりました。私が元気に学校に行くことができているのは母のおかげです。そのようなことから私は母に見送られる時間を大切にしています。母の「いってらっしゃい」が私に大きなちからと勇気をくれるのです。

私は「いってらっしゃい」の意味について考えてみました。おそらく大体の人が「あいさつだから」や「意味などわからない」と考えると思います。そのようなことは当然です。ごく普通に使っているあいさつの意味など単純です。しかし、私にとっては単純にあいさつであるというわけではないのです。「いってらっしゃい」には「今日も頑張ってきなさい。応援しているよ。」という母の思いがたくさん詰まっています。だから私の家では学校に行くときは母がどんなに忙しくても玄関まで来て言うのです。

「いってらっしゃい。」

と。母の思いであふれている大切な大切な魔法の言葉、「いってらっしゃい」から今日も私はちからをもらっています。私は大人ではないのでできることは限られています。しかし、毎日もらえるちからで精いっぱい生きることが私のできることです。どんなに辛いことがあっても日常の中でちからをもらっています。「いってらっしゃい」のちからは私の起動力です。車でいうエンジンに近いものだと思います。「いってらっしゃい」への意識が変わってもうすぐ一年が経ちます。母からは

「成長したね。よく頑張ったよ。」

と言われました。だから私は母の「いってらっしゃい」に応えるように思いを込めて言います。

「いってきます。」